



図書館だより

2022.4
No. 37

長崎県立大学佐世保校附属図書館

〒858-8580 佐世保市川下町123
TEL 0956-47-2191 (代表)
<http://sun.ac.jp/center/lib/sasebo/>

激動時代における アイデンティティとしてのナガサキ ～カズオ・イシグロにみる～

木村 務
(学長)

今年2月末からのロシアのウクライナ軍事侵攻は、数十万人が住む都市を次々と消滅させる「ジェノサイド」と世界を震撼させている。

私は、長崎出身でイギリスの小説家カズオ・イシグロ氏が、5年前のノーベル賞受賞講演において、「人種差別が、一伝統的な形でも、売り込みやすい現代的な形でも一ふたたび勢いを盛り返す気配です。いま、埋もれていたモンスターのよう、文明社会の大通りの下でうごめきはじめています」(カズオ・イシグロ『特急二十世紀の夜と、いくつかの小さなブレイクスルー』、土屋政雄訳、早川書房、2018年、89頁)と語ったことを思い起こし、今やそのモンスターが文明社会の大通りを闊歩しているのだと思った。

2016年、ヨーロッパでは深刻な移民問題が発生し、イギリスは国民投票でEUから離脱を決定した。アメリカではトランプ大統領が選出され、メキシコとの国境に壁を築くなど排他的な政策を次々と打ち出し、国際機関からも離脱、独裁的な指導者が選ばれるポピュリズムが世界を覆い始めた。

地球上には、地球温暖化やコロナウイルスのパンデミックが起こっており、これらの課題を解決するには国家間や民族間の「連帯」と「協調」が不可欠であるのに、「差別」と「分断」、「独裁」と「覇権」が席卷し、平和・平等・民主・人権という人類普遍の価値さ

えも「西欧的価値観」として相対化される時代、独裁者の愚行でさえ抑止できない時代、これがモンスターの正体であろう。

イシグロ氏のノーベル文学賞受賞理由についてスウェーデン・アカデミーは、“who, in novels of great emotional force, has uncovered the abyss beneath our illusory sense of connection with the world”「強く感情に訴えかける数々の小説により、世界との結びつきという錯覚の下に口を開ける奈落を描き出してみせた」(前掲、土屋政雄訳 3頁による)こととされた。

確かに、イシグロ氏の作品の多くで、世界の急激な変化とパラダイム転換の中でとまどう人々の心情が、巧みな対話の中に表現されていると思う。たとえば、最初の長編小説『遠いやまなみの光』1982年 *A Pale View of Hills*、(小野寺健訳、早川書房、2001年)では、1970年末イギリスに拮がったフェミニズムを背景に、新しい母娘関係を築こうとする女性の生き方を通し、急激な社会変化と価値観の転換のなかで、自分のアイデンティティを貫こうとするつらさ、魂の深淵が描かれている。

そして、被爆し廃墟となった長崎で立ち上がる人びとという舞台設定は、急激な社会変化と価値観の転換という時代認識に対する読者の理解を容易にしている。なお、ここで描かれた長崎は、「想像上の長崎」「どこにも実在しない架空のナガサキ」(平井杏子『カズオ・イシグロの長崎』長崎文献社、2018年、90頁)であり、過酷な環境の中で生き抜く女性たちのイメージを沸きたてる歴史的で象徴的な「場所」としての長崎である。

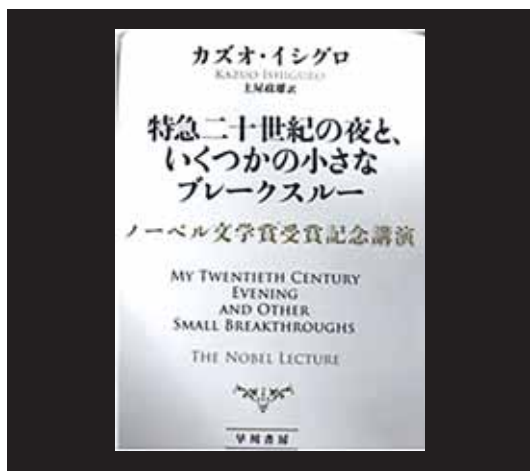
この作品は英国王立文学協会より表彰され、イシグロ氏はイギリスにおいて小説家として広く認められるに至った。

敗戦後日本の地方都市という舞台設定は、2 作目の長編『浮世の画家』*An Artist of the Floating World*, 1986年でも行われている。イシグロ氏自ら2016年の〔新版〕の「序文」（『浮世の画家〔新版〕』飛田茂雄訳、早川書房、2019年、15 頁）で述べているように、この小説を書いた80年代前半のイギリスは、サッチャー政権のもとで混合経済から新保守主義へと転換した激動の時代であり、「時代の独善的熱狂を超越して物事を明確に見直すこと」が困難な時代であった。小説では、戦前期に高名な画家となり戦争を鼓舞する絵を描いた主人公が、敗戦後の価値転換の中で、過去の行為は過ちであったと受け入れる姿が描かれた。

この作品は、権威あるブッカー賞の最終候補となり、イシグロ氏はイギリスのみならず米国など広く世界の小説家としての地位を獲得した。

ナガサキは「私に自信とアイデンティティの感覚を与えてくれる場所」であるとイシグロ氏は言う（前掲『特急二十世紀の夜と、いく

つかの小さなブレイクスルー』35頁）。それは、世界が激変する時代におけるグローバルなアイデンティティは、超国家的なものではなく、歴史と文化を踏まえた地域から生ずるということではないだろうか。今地方都市を消滅させるモンスターが闊歩する時代にあって、改めて世界の中で長崎がアイデンティティを発揮するときであろう。



『仮説思考のススメ』のすすめ

後 藤 正 之

（附属図書館長）

「たのしみは 珍しき書 人にかり

始め一ひらひろげたる時」

令和4年度附属図書館長を拝命した、地域創造学部実践経済学科の後藤と申します。皆様、どうぞよろしくお願い申し上げます。

冒頭のうたは、江戸時代の国学者で歌人である橘曙覧が詠んだものです。ここで「書」は、ふみ、と読み、本のことを指しています。また、「始め一ひら」とは、最初の1 ページのことです。さらに古語辞典を見ると、「珍し」には、あまり見られない、の他にも、すばらしいとか、目新しい、という意味があることが分かります。

よって、このうたは、本を通じて新しい知識を得ることの期待感・喜びを伝えるもので

す。しかしながら、読みたい本を全て所有することは、多くの愛書家の夢ではありますが、現実的に不可能です。そこで、「人にかり」という手段を用いているのです。

図書館は、まさにこの本をおかしくすることが細大の使命です。多くの方々が図書館を大いに活用され、新たな知に触れる喜びを体験していただけることを、館員一同心より願っております。

さて、この文章を読んで下さっている方の多くは、この春の新入学生だと思います。春からの環境変化への対応に、さぞや苦労されていることでしょう。しかし新入生以外でも、大学での学修・研究にどのように取り組んでいけば良いのか、戸惑っている方も多いのではないのでしょうか。

高校生までの勉強、特に入試対策では、いろいろな公式や解法を記憶して、与えられた問題の「正解」を求めることが中心だったの

ではないでしょうか。これに対して大学では、それぞれの専門分野における重要な理論を学び、現実の問題に適用できるようになることを重視します。しかしながら、この世の中には絶対に正しい理論というものは存在しません。例えば、経済学では中央銀行が貨幣供給を拡大すればインフレが発生すると信じられてきましたが、日本では銀行の長期的な超金融緩和政策にもかかわらず、長い間物価は殆ど上昇してきませんでした。また国際関係論によれば、21世紀には国家間の大規模な戦争は生じないと考えられてきましたが、直近時点で我々はロシアによるウクライナへの軍事侵略を目の当たりにしています。このように、それまで主流であった理論では説明できない事態が生じることは、決して稀なことではないのです。

であるとしたら、そもそもどのようにして理論を構築していく必要があるのでしょうか。

そうした疑問を持つ方には是非お勧めしたい本が、牧野悌也 他著『科学的思考のススメ「もしかして」からはじめよう』（2021年 ミネルヴァ書房）です。科学というと物理や科学など理系分野のみを想像しがちですが、経済学・経営学・政治学など社会を扱う学問も、社会の営みを扱う社会科学として広い意味で科学に含まれています。従って社会科学の分野を学び研究していく上でも、科学的思考を身につけることは必要不可欠なのです。

本書では、この「科学的思考」の中核となる、「仮説」を用いた考え方の基本が、次のように実に分かりやすく解説されています。

いまある物事に遭遇したとき、なんでそうなるのだろう？と、その物事の「裏にあるものを推理し予測することが、仮説を立てるという行為」（同書 20 頁）にほかなりません。この仮説構築のプロセスでは、第一に物事をよく観察して、何かに気づくことが必要です。次に、その観察した何かの理由を、「もしかして」というかたちで仮説（仮の説明）を考えるのです。さらにそうした仮説がしっかり

した根拠に基づくものであることを確認するため、新たな実験や観察を通じて、仮説が正しいとした場合に成り立つ予測が得られるかどうかを検証します。もしも検証結果が予測と一致しないのならば、より広い視点に立って新たな仮説を立て、同じように検証を行います。そうした課程を経て、最後に生き残った仮説が、当面は真実であると扱われることになるのです。しかしこの生き残った仮説であっても、状況の変化や新たな発見によって、実は誤りであるということが判明するということは、ごく普通に生じます。その場合には、さらに最初に戻って、新たな仮説作りから新たなプロセスをはじめることになります。

このように、現時点では正しいと考えられる理論があっても、それに満足して立ち止まってはいけないのです。それらが実は誤っているという可能性を常に認識し、少しでも本当の真実に近づこうとする試行錯誤こそが科学であり、学生の皆さんがこれから大学で取り組まれる研究活動の本質なのです。

またこうした科学的思考は、単に学問分野だけにとどまらず、日々の生活において意思決定を行う際であっても（例えば、次のアルバイト先をどこにしようか、と考える場合など）、たいへん役に立つことも本書に述べられています。学生の皆様が、本書を通じて科学的思考を身につけていかれることを期待申し上げます。



本との出会い

岩清水 由美子

(経営学科教授)

人生にはさまざまな出会いがあるが、本との出会いもそのひとつだろう。

中学・高校時代、本屋で見かけた本の題目に何となく惹かれ、時々小説を読んでいたが、私の人生に最も大きな影響を与えた本は、大学三年の時、英文学科の授業で読んだポーランド出身のイギリス現代作家ジョウゼフ・コンラッドの『闇の奥 (Heart of Darkness)』(研究社小英文叢書)だった。

この小説は、コンラッドの1890年のコンゴ旅行を元にしていて、十九世紀後半ヨーロッパ列強がアフリカ分割をしていた時代を背景に、植民地支配の理想を抱いてアフリカの奥地に渡ったクルツという青年が、交易地で次第に変貌し、道徳的に墮落していく様子が印象的に描かれている。130ページほどの小説だが、英文が長々と続き、どこに繋がっているのか何度も読み直さないと分からず、しかも知らない単語が次々に出て来るので、予習に随分時間がかかった。当時、中野好夫氏の翻訳が岩波文庫から出ていたので、原作とつき合わせながらやっと理解できる程度だった。一回の授業で2ページ位しか進まなかったのも、どんなストーリーなのか最初はきちんとつかめなかったが、独特の文体と作品のもつ雰囲気によって圧倒され、この小説の虜になった。

このことがきっかけで、四年生になった時、アメリカ文学のゼミに所属していたにもかかわらず、この小説で卒論を書きたいと思うようになった。そして卒論を書く内に、コンラッドの小説をもっと研究したいという気持ちが強くなり、大学院への進学を考えるようになった。大学院に進学できるのだろうかという不安もあったが、親に相談すると最初は経済的理由で反対されたが、二年間だけという

約束で進学を認めてもらった。しかしながら、二年経過してもコンラッドの小説を十分理解できたとは言える状態ではなかったので、博士課程に進学した。学費と生活費はアルバイトと奨学金で賄いながら、研究を続けている内に、気がついたら大学で教えるようになっていた。四年生になるまで大学院に進むことは全く考えていなかったのも、『闇の奥』という本のもつ魔力が、私の人生の方向を変えてしまったように思える。

研究職についてからも、『闇の奥』の影響は続いていた。最初の勤務校の講義で岩波文庫の翻訳を使ったのだが、中野氏の個性が滲み出た味わい深い訳ではあったが、学生から読み辛いという声があった。1958年に出版されたものだったので、当然だったかもしれない。そこで、もっと読みやすい翻訳をして、できるだけ多くの人に読んでもらいたいという気持ちから、無謀にも翻訳を試みた。初めての文学作品の翻訳は思ったより大変で、途中で何度も断念したくなったが、『闇の奥』(近代文芸社)として出版することができた。それは日本で二番目の翻訳となり、その後更に二つの翻訳が出たので、コンラッド小説の翻訳ブームのきっかけを作ったと言えるかもしれない。本が本を生み出したのだ。

更に、昨年『コンラッドの小説におけるジェンダー表象—ミソジニストをこえて』(南雲堂)を出版することができた。この本は、コンラッドの小説に登場する男性人物と女性人物を、作品が書かれた時代背景や作者が育った文化的背景を視野に入れ、ジェンダーの諸問題を切り口に考察したものである。これまでに書いた論文を単行本としてまとめたのだが、幅広い読者に読んでもらえることを念頭におき、分かりやすく書くよう努めた。体系的にまとめる作業に加え、三回もの校正は大変だったが、「本を書く」側になって気づいたのは、本の中には書き手のさまざまな「思い」が詰まっているということだ。だからこそ、いつまでも残る感動を与えることができるの

だろう。

大学に入学された皆さんは、本を読み、考える時間が比較的多くあると思う。多感な年

頃に、たくさんの素晴らしい本に出会われることを切に願っている。

いしずえ 学びの礎

山 本 裕

(国際経営学科 教授)

新入生の皆さん、入学おめでとうございます。そして、在校生の皆さんにとっても心機一転、新しい年度が始まります。この小論では、大学での学びの礎となる文献（古典）についてお話しします。

大学の発祥は中世のイタリアやフランスに遡ります（新ゼミテキスト参照）。日本でも明治以降大学制度が整い、多くの科学や技術と同様に学問も西欧から取り入れました。その西欧を貫く思想体系は、普遍主義と呼ばれるキリスト教の考え方です。難しい用語では、形而上学（けいじじょうがく）と呼ばれます。したがって、これから大学で学問を修める皆さんは、西欧の学問の集積である古典、とりわけ形而上学との関りを学ぶ必要があります。

皆さんは中学や高校の世界史で、ギリシャやローマ時代からの史実は学んできたはずですが、しかし、プラトンの著書、『ソクラテスの弁明』やカエサル（Caesar）の『ガリア戦記』を年号とともに暗記はしても、実際にそれらを紐解いてみた人は多くはないでしょう。ここでの話は、普遍主義との関係からキリスト教がローマ帝国に伝わって以降とすることにし、古代ユダヤ教や『旧約聖書』、ギリシャ哲学は別の機会に譲ります。

ローマ帝国が東西に分裂し、帝国の力が分散すると、教権（ローマ法王）の力が絶大となります。したがって、学問の世界も当時のキリスト教の解釈である、スコラ哲学が中心でした。しかし、中世は日本人からすると学びの上でも遠い世界で、アウグスティヌスの『告白』やトマス・アキナスの大著『神学



大全』には歯が立ちません。ここでは大家の解説書である、山田昌『アウグスティヌス講話』と稲垣良典『トマス・アキナス』を紹介しします。中世はしばし「暗黒の」といった枕詞が付くほどで、人々の生活に大きな進展は見られませんでした。そこで、華々しかったギリシャ・ローマ時代を回顧する芸術の復興運動、ルネサンスが起こります。卒業旅行では、ぜひ、イタリアにも行って下さい。世界遺産の神殿やダヴィンチの絵画が皆さんを待っています。同じ時代に書かれたのがマキアヴェリ（Machiavelli）の『君主論』。イタリアはパチカンが広大な領地をもったこともあって諸国が分裂したままで、近代になっても欧州の主要国の中では国家の統一が遅れました。ルネサンスの時代に小国に分裂した封建国家の君主のあるべき姿をマキアヴェリは示したのです。時代はルターやカルヴァンの宗教改革を迎え

ます。

中世から市民社会に移行するまでの社会は自然状態と理解されました。代表例がホッブスの『リヴァイアサン』ですが、ありのままの社会の状態は「万人は万人に対してオオカミである」とか、「万人の万人に対する闘争状態」と記されています。人間は放っておくと何をしでかすか分からないとの解釈です。そういった社会に暮らすのは危険なので、人々は国家と契りを交わして、安寧を確保する。それが理論的な市民社会の発生です。この議論を深めたのはルソーの『社会契約論』が有名ですが、同時代には『統治二論』を書いたロックもいます。

さて、ガリレオなどを通じて天体や科学のことが分かってくると、それまでのキリスト教の解釈と異なることも出てきました。そこで定理や公準から、どのような状況でも同じ答えを導き出すことを重視する合理主義の考

えがでてきます。『方法序説』を著したデカルトや『エチカ』のスピノザ達です。数式や定理から導出される結果を真理とすると、すべては神の御心によって決まるとする形而上学の考え方とは異なりますが、方法序説では神との調整に紙幅が割かれています。神の存在証明はカントの考察をもって人知で明らかにされることはないという一定の結論が出ていますが、2年生のゼミではカントの「永遠平和のために」を憲法9条と併せて議論すると盛り上がりました。ニーチェやフロイトまで行きたかったのですが紙幅がありません。関心のある学生は、ゼミに来て下さい。時代が前後しますが、19世紀後半のウェーバーには多くの分野の研究があります。宗教改革のダイナミズムを仕事や商業（産業）の発展と絡めた分析として『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』を最後に挙げてこの小論を終わることにします。

ある日公務員試験の基本書が発禁処分になったら

相 馬 清 貴

(公共政策学科教授)

本学は将来の職業として各種公務員を志望する学生が多いと聞きます。学生の皆さん、公務員試験の勉強はもう始めていますか。

公務員試験の受験対策にはいろいろな方法がありますが、主要科目については、まず基本書を読んで当該科目の全体像を把握し、次に過去問を繰り返し解き知識の定着を図り、併せて出題傾向や問題のパターンをつかむ、というのが多くの受験者が取る方法ではないかと思います。

さて、この公務員試験、その歴史は戦前に遡ります（とはいえ「公務員」は戦後の用語であり、戦前はもっぱら「官吏」という言葉が使われていました）。例えば「高等文官試験」（現在の「国家公務員採用総合職試験」や「司

法試験」に相当する試験といえましょうか）についていうと、明治20年（1887年）にその原型となる形が始まり、戦後の昭和23年（1948年）まで実施されました。試験科目は、時代により多少の変遷はありましたが、行政科（現在の「国家公務員採用総合職試験」の事務系区分に相当）、司法科（現在の「司法試験」に相当）及び外交科（廃止された「外務公務員採用I種（上級）試験」に相当）の各区分において「憲法」（「大日本帝国憲法」のことです）は常に必須の試験科目でした。そして受験生がその憲法の学習のために使用した定評のある基本書の一つが、美濃部達吉著「憲法撮要」（初版は大正12年（1923年）有斐閣）でありました。

ところが、この本を含む美濃部の三著書は昭和10年（1935年）に起こったいわゆる天皇機関説事件により、発禁処分になってしまいました。試験勉強にそれまで広く使われていた基本書がある日発禁処分になるとは、当時の受験生も相当混乱したのではないでしょう

か。加えて、大学における憲法の講義も、美濃部の説に近い考え方の憲法担当の教員が交代したり大学によっては憲法の講義そのものが休講となるなど、大きな波紋があったようです。それにしても、それまで何の問題もなく広く読まれていた本が突然発禁処分にとられるとは、ひどい時代であったものです。ちなみに、美濃部自身も不敬罪で告発され、検事局で取調べを受けましたが、この取調べに当たった検事さえもが美濃部の教え子であったようです。美濃部は、不敬罪には該当しないとされたものの出版法違反の嫌疑はあるとされ、起訴猶予処分となりました。また貴族院勅選議員の職を辞めざるを得なくなりました。

さて、この「憲法撮要」は復刻版が平成11年（1999年）、改訂版の復刻版が翌年に出され、いずれも本学の図書館の蔵書になっています。美濃部の有名な学説である天皇機関説を知る上で必読の文献であり、また発禁処分となるまで大日本帝国憲法の「正統な」解釈がどのようなものとして知識階級に共有されていたかを理解するためにも重要な書籍ですが、文語体で旧仮名づかい、また今となっては難読漢字が多いこの著作は、現代人にとって決して読みやすいものではありません。日本近代史や憲法史に関心がある学生の皆さんには是非挑戦してもらいたいと思いますが、尻込みをする皆さんには、より

分かりやすい形で美濃部の思想が示されている本として、美濃部達吉著「憲法講話」（岩波文庫白版2018年。原著は大正7年（1918年）を勧めます。学校の先生を対象にした講演会の記録をベースにしたこの本は、口語的に書かれており非常に読みやすく、しかし美濃部の基本的な考え方を余すところなく伝えています。

私は、日本国憲法と大日本帝国憲法との間の断絶と（潜在的な）連続性を知ることは、日本国憲法をよりよく理解するためにも不可欠なものだと考えています。書店に行ったらこの「憲法講話」、是非手に取ってみてください。



真鍋淑郎先生の ノーベル物理学賞を祝して 坂元 洋一郎

（実践経済学科 准教授）

2021年10月ノーベル物理学賞の受賞者に真鍋淑郎先生が選ばれたというニュースが日本中を走った。受賞の理由は、真鍋先生が50年以上も前に、非常にシンプルで本質を突いた気候の予測モデルを作り、地球温暖化が人類の活動によって起きたことを科学的に裏

付けられたとのことであった。私も環境経済学を専門領域としている研究者の1人としてたいへん喜びお祝い申し上げたい。現在、私は、研究テーマである「排出権取引制度における温暖化対策への有効性について」のもと温暖化対策としての排出権取引制度の有効性を検証している。このきっかけとなり、参考しているのが“気候変動に関する政府間パネル（IPCC）”の報告書であり、そのIPCCで使われているモデルの基盤を作ったのが真鍋先生である。山形俊男先生（東京大学名誉教授）が次のように真鍋先生の功績を讃えてい

る。(東京大学大学院理学系研究科 HP ノーベル物理学賞2021受賞決定真鍋博士より抜粋)

『真鍋博士は、1957年に正野重方教授の下で気象学の学位を取得後、すぐに米国気象局(現在の米国海洋大気庁)の地球流体力学研究所に移り、地球温暖化予測の研究で半世紀以上にわたり世界をリードしてきました。～

1955年にワシントン DC の米国気象局(当時)に地球流体力学研究所が設けられ、ジョセフ・スマゴリンスキー (Joseph Smagorinsky) が初代所長に任命されました。スマゴリンスキー所長は大気大循環モデルの開発を真鍋博士に、海洋大循環モデルの開発はカーク・ブライアン (Kirk Bryan) に任せました。二人は大気と海洋の大循環モデルを結合し、フォン・ノイマンが夢見た地球気候の研究を始めたのです。1967年、スマゴリンスキー所長はフォン・ノイマンが気候研究の着想を得た地、プリンストンに研究所を移し、プリンストン大学との連携を強化して、アカデミックな雰囲気の中で学際的な気候研究を推進できるようにしました。その後の計算機能力の急速な進展で地球気候をまるごと、そしてその季節性までも再現できるようになり、二酸化炭素濃度を人為的に倍増した場合の世界各地の気候への影響も調べることが可能になりました。こうして現在気候変動に関する政府間パネル (IPCC) で使われているモデルの基盤が整ったのです。』と。

このように、真鍋先生は、現在、世界全体で抱えている温暖化問題について、だれも考えつかなかった50年以上も前から世界に先

駆けて二酸化炭素による温室効果に関する研究を始められ、地球における気候を考える上で重要な物理モデルにコンピューターを用いた数値モデルで明らかにした、その功績はほんとうに素晴らしいことである。

さらに真鍋先生のことを知りたくなった方に次の4冊を紹介したい。真鍋先生自身あまり本を出版されておらず、真鍋先生が寄稿している貴重な論文である。真鍋先生は、ノーベル賞受賞の際のインタビューで、何度も「好奇心」という言葉を使い、「好奇心こそが私の研究活動すべての原動力」ということを言っており、その人物像が窺えるのではないかなと思う。ぜひ関心を抱かれた方はご一読いただきたい。

ロバート・ワトソン / 編集代表『環境と開発への提言—知と活動の連携に向けて—』(東京大学出版会、2015年) 第6章地球温暖化と水資源 真鍋 淑郎 / 著 p93-95

林 良嗣 / 編(名古屋大学環境学叢書3)『東日本大震災後の持続可能な社会—世界の識者が語る診断から治療まで—』(明石書店、2013年) 第1章地球温暖化と水: 基礎科学から臨床環境学へ 真鍋 淑郎 / 著 p12-33

ジェローム・バンデ / 編『地球との和解—人類と地球にはどんな未来があるのか—』(麗澤大学出版会、2009年) 第5章水資源利用可能性に対する気候変動の影響はどのようなものか 真鍋 淑郎 / 著 p78-88

さがら 邦夫 / 編『地球温暖化は阻止できるか—京都会議検証—』(藤原書店、1998年) 第1章シミュレーションが予測する全地球の気候異変 真鍋 淑郎 / 著 p89-116

◆附属図書館HPアドレス <http://sun.ac.jp/center/lib/sasebo/>

●当館は本学学生以外の方でも県内にお住まいの15歳以上の方は利用できます。

●開館時間／平 日：午前8時30分～午後10時まで(学生の休業期間中は午前9時～午後5時まで)
土曜日：午前9時～午後5時まで 休館日：日曜日・祝日・大学閉校日など

現在、新型コロナウイルス感染拡大防止のため、学外者の利用は控えさせていただくなど利用制限を行っています。

編集・発行責任／長崎県立大学佐世保校附属図書館運営委員会 発行日／2022年4月30日